

北海道自然保護協会会報
Nature Conservation Society of Hokkaido

1996年3月号
No. 94

NC HOKKAIDO



エゾシカ
写真: 福地 郁子

アウトドアブームと コモンスの悲劇

佐藤 謙 (副会長)

アウトドアブーム

アウトドアブームは、近年ますます高まる一方です。自然と親しむことは、私たちの健康な生活のため、欠くことができないものです。しかし、海、川、山を問わず、北海道各地の自然がこのブームによって荒廃していることも大きな事実です。その直接の原因として、多くの人々が自然に親しむようになり、集団として集中的に利用（オーバーユース、過剰利用）するようになったこと、カヌー、スノーモービル、オフロード車、キャンピングカーなど新たな道具が加わり、楽しむ範囲が拡大したことが考えられます。現状のように、自然を楽しむために本来の自然が荒廃するとすれば、その楽しみ方は将来に継続できない一時的なものとなりましょう。

(1) 釣り

釣りブームは、ゴルフの場合と似て、テレビ番組への登場とともに急激に盛況になっております。でも、今の釣りブームには、子供時代の雑魚釣りとは大きな落差を感じます。企業による釣果を増やすための餌や釣具の改良が先行し、資源量の限界については考慮されないうまま、少ない沿岸の漁業資源を漁業者と競争するに至っていると感じます。湖沼、

河川では、本州におけるブラックバス、北海道のニジマスなどの移入種が増加し、在来種を捕食したり、競争で追いやりたりする元来の生物相への重大な影響が指摘されておりま

す。
別な影響として、テグスや釣り針の鳥類への影響、おもりとなる鉛の害、釣り人のゴミの投げ捨てなどがすでに指摘されているところですが、テグスについては一定期間後に溶けてしまうものが考えられていると聞きますが、実用化はまだです。北海道では、とくに竿が林立する秋のサケ釣りに代表されますが、江線までのオフロード車の乗入れが問題視されます。オフロード車による海岸動植物への影響は重大で、自然保護のために指定された海岸草原（原生花園）ですら荒廃している現状です。

(2) 登山

登山ブームによって、北海道では、アポイ岳や岬山などのように山体が小さな山岳ほど、明らかに収容力を超えた過度の利用が進み、高山植物の踏みつけ、盗掘、ゴミの増加が問題となっております。現在、アポイ岳ではトイレの設置が話題になっておりますが、登山者増加を是認してトイレを設置するのではなく、尾瀬が原のように登山者を制限する方策

が必要ない段階と考えるべきでしょう。稀少で綺麗な高山植物を将来まで見続けるためには、その利用の程度を考へなければならぬのです。

すでに登山路がある人気の高い山岳では、登山路の増設やロープウェイの規格拡大がよく話題にあがります。そのような大雪山系の黒岳や旭岳、あるいはニセコ山系では、比較的大きな山体の山岳でありながら、収容力を超えた利用が危惧されます。自然保護のために登山路が無い方がよい山岳があります。ところが、登山路の新設、あるいは気象観測のための道路などが、あまり議論されずにいつの間にか出来上がってしまった、それまで守られていた自然が荒廃する例が少なくありません。これらは、河川源流部に達した林道の開放とともに、山頂部へのアプローチを容易にする悪影響が危惧されるのです。

スノーモービルは、登山手段として認知されていないと思いますが、近年あちこちの山頂で見かけるようになりまし。乗入れ禁止の山系であつても、山頂まで大挙してスノーモービルが走り回っている現状です。雪原での爆走は、動植物への影響が危惧されますし、雪崩誘発など、一般登山者あるいはスノーモービル運

転者自身の生命への危険が生じます。スノーモービルは、山岳レジャーではなく、生活の道具としてあるべきではないかと考えます。

(3) 山菜ブーム

山菜ブームも、著しいものがあります。北海道ではチシマザサ(タケノコ)、ワラビ、ゼンマイ、アキタブキ、ウド、タラノキ、ユキザサ(アズキナ)、クサソテツ(コゴミ)、ギョウジャニンニク、エゾノリュウキンカ(ヤチブキ)、ハマボウフウなどが好まれて採取されており、しかし、札幌近郊で見ますと、採取圧力に対する抵抗性の違いによって、減少が著しい種類が認められます。伐採跡地のように攪乱された向陽地を好むタラノキでさえ、全ての芽が摘み採られて枯死してしまつたところが少なくありません。札幌近郊のウドは、減少が著しい状態と言えます。採取に強いと思われるアキタブキでも、大きな個体が少なくなつたような気がします。

海岸砂丘に生育するハマボウフウは、少なくとも石狩低地帯以南では、砂丘自体の減少と著しい採取によって減少が明らかです。山菜ブームは、全国的に山菜としての利用頻度が低く、今や見近な自然の指標植物とされているカタクリまで、スーパーマー

ケットに並べてしまつております。食べることが可能ということと食べることが、別です。カタクリのように従来あまり利用しなかつた植物まで山菜とするのは行き過ぎであり、一方で浅い歴史の山菜であればすぐに中止することができるとは思いません。カタクリは、成熟まで時間がかかる植物であり、山菜利用に適さない植物です。

コモンズの悲劇からの脱出

現在のアウトドアブームによる北海道の自然の荒廃を考えますと、学生時代に印象深く読んだハーディンの「コモンズの悲劇」を思い出します。

コモンズとは、かつてスコットランドにあつた羊の共同放牧場であり、個人が何頭の羊を放牧しても良い仕組みを持つておりました。しかし、放牧場には全体で何頭放牧できるかという収容力がありますので、個人個人の自由によって収容力を超えた頭数が放牧(過放牧)されますと収容力がゼロに向かつてしまいます。この共同放牧場の仕組みは自ずから「持続できない悲劇」を持つていたのです。

ハーディンは、コモンズが「個人の自由な利益追求により全体に不利

益が生じる仕組み」であることを指摘した上で、汚染や自然保護の環境問題の解決策は、水、大気、土地などをコモンズの仕組みにしない、全体の利益と不利益を一致させることであると主張しております。

釣り、登山、そして山菜を例にした北海道のアウトドアブームの問題点は、まさにコモンズの悲劇に当たります。今、流行の自然の「賢明な利用」や「持続的利用」を併せて述べますと、私たちの子孫が私たちと同じように自然を利用できるためには、現在の私たちが皆で適度に制限しあい、全体としての自然を失わないようにしなければならぬのです。ところで、個人の楽しみ、個人の自由を制限を加えられるのは、非常に嫌なことです。私たち社会全体が法的に守っているはずの稀少植物でさえ、山草栽培愛好家の楽しみのために盗掘が横行して絶滅に瀕している現状です。まして、現在無制限に利用可能な自然については、何故、我々の楽しみを制限するのかと叱られそうです。

でも、個人の利益と全体の不利益が生じるコモンズ状態の自然の利用については、個人の楽しみを継続させるため全体で制限しなければならぬのです。そのためには、あるが

ままの自然を壊さないようにした別の楽しみ方を工夫することが、本当のアウトドアだと思つております。現状のアウトドアブームに見られる自然の楽しみ方は、自然溢れた場所でも都市スタイルのスピーディで快適な生活を目指していると感じます。どこでも、都市と同様な快適さ、便利さ(アメニティ)を追求してしまひ、本当の自然は見えないで壊れてしまふ現状と思ひます。現在、開設が続いているオートキャンプ場と周辺の自然を見ましても、このことを強く感じてしまいます。私たちには、ブームにあおられない本当の自然の楽しみ方が求められていると思ひます。

(札幌市在住)

豊平川の河畔林をめぐって

竹中 万紀子

(豊平川ウォッチャーズ代表)

自然保護と言うと、大雪山や釧路湿原など、人々の生活からはかけ離れた場所です。普通の人とはかけ離れた人達が行っている活動という印象が強いが、身近な自然を見直そうという動きも近ごろ盛んである。身の周りの自然を守る市民の会が各地に結成されている。かなりの成果を上げているところも多い。東京の野川の保護復元活動等はその典型だろう。

市を南北に流れる札幌の「顔」ともいえるべき豊平川の自然を見直そうと、遅まきながら「豊平川ウォッチャーズ」という市民の会が今年の一月に結成された。十名の発起人はそれぞれ職業や立場は違うが、川を今より「すてきな場所」にしたいという思いは同じである。

札幌の景観は西側の藻岩山に連なる山並みと、その東にはほぼ北東に流れる石狩川に注ぐ豊平川によって特徴づけられる。藻岩山が保護林や風致地区として保護されているのに対し、豊平川は開拓時代から「暴れ川」として、如何に効率よく手なづけるかに主眼がおかれ、その自然は顧みられなかった。「豊平川流域はもともどんな植生があったのかすら記録にない」とある植物の専門家は嘆く。野鳥の会の定例探鳥会も円山等で行われるが、豊平川では行われな

い。市民にも専門家にも見捨てられてきた川といつても過言ではない。

川の中流域から下流に入ったあたりは、川の両岸の土手は、二車線の豊平川通りになっている。「準高速道路」ともいえるべき車が猛スピードで駆け抜ける幹線道路である。土手の河畔側にはプランター等で縁どられ、サケの模様のこざいなガードレールで守られた歩道があるが、交通量と比べると歩く人は少ない。その河川敷で目立つのが、石山大橋辺りから豊水大橋まで二十km程にわたってと続く芝生公園や運動公園である。護岸工事と造成はまだ進行中で、数少ない自然の草地は、更地になって護岸と運動公園完成を待っている。

人の手が入っていない河畔は、市の中心街から約2kmのところにある一〇〇m×二〇〇m弱の、本当にわずかな場所だけになってしまった。東区と白石区をつなぐ環状北大橋下流の左岸にあるこの場所は、樹齢十五年以上のタチヤナギが樹冠を形成している発達した河畔林となっている(以後、環状北大橋河畔林と呼ぶ)。その下流にはオオイトドリ、ヨシなどの草地が広がる(この草地は去年秋に護岸と緊急車両の取水道路整備で切られた。開発局は、表土を取っ

ておいてかぶせ直したからすぐに復元すると言うが、草地全体を一度に切つたため、春に草原の鳥が渡つてきた時は繁殖場所がないことになる)。

河畔林のすぐ下の川は大きな淵になっており、ウグイと思われる何万という小魚がいる。環状北大橋河畔林から上下流にかけては中洲やよどみ、複雑に繁つた草地などが約5kmにわたって続き、一七六万都市の中心街のすぐそばであることを忘れさせてくれるような、風情と景観を漂わせている。七、八十年前の豊平川はどこもこんなだったに違いない(写真)。

右岸はコンクリート護岸され殺風景な運動公園が広がる。その右岸を見ないようにはすれば、「雄大な自然を誇る北海道」の都である札幌市に一番ふさわしい景観が広がる。

発起人の一人で景観の仕事をしているUさんは、延々と続く芝生運動公園だけが札幌市の景観の軸ではないのだろうかという疑問を持っている。芝生公園は元々あった河畔の植生を全滅させて造つた人間のための空間だ。芝生を全部なくせとは言わないが、「雄大な自然」を唱い文句にしている道都の一番目立つ場所が、芝生ばかりというのは少々恥ずかしい。せめて粗放草地公園位あつてもいい。去る一月十二日に開かれたウォッチャーズの意見交換会でも、五十年前子供



このような河

畔林は、単に人が景観美を楽しめるだけではない。動植物にとつても利用しやすい場所なのである。私はムクドリやカラスのねぐらや食性を調べているが、ムクドリは若鳥が自立するまでの時期や渡りの前後など、生活史の要の時期に河畔林を利用する。カラスも河畔林で営巣する。札幌周辺を調査地にしているが、市内でも石狩平野の耕作地帯でも河畔林は次々に切られ、ムク

ドリの生息の重要な拠点がなくなりつつある。(これを書いている間に、開発局札幌河川事務所から「雁来大橋下流左岸の河畔林を緊急用船着場整備のために伐採する。すでに昨秋から着手しているが了承願いたい」

との電話があつた。私たちは昨年十二月に河川事務所を訪れ、自然を保全するためにも今後の工事は事前に知らせしてほしいとの旨を伝えている。その時点で着工していたのに一言もなかった。阪神大震災後に緊急時の整備計画が決まり、予算が下りたという。船着場から真駒内まで土手の内側に緊急車両用の道路建設も予定されているらしい。災害に備えるとはいえ、たった数カ月で自然環境への配慮など周到な調査検討、施設の将来的な有用性といった十分な判断が下せるのだろうか？コンクリート護岸の船着場より根の張った発達した河畔林のほうが地震等に対して強いのではないか？緊急時に一時的な船着場を設けても、それ以外の長い年月は自然のままにしておけないのか？……色々と考えが浮かぶが、ともかく豊平川に残る数少ない豊かな河畔林が消滅し、ムクドリのねぐら林がまた一つなくなった。)

日さんはバードウォッチ歴二十年以上の生粋の豊平川ウォッチャー。彼女は、中流から下流域で六十六種の鳥を観察している。その三分の二が河畔林の発達した環状北大橋河畔林から雁来までの流域に集中している。鳥だけでなく、何種かの哺乳類もいる。彼女もマウンテンバイク

で河畔林を訪れる度に「本当にすてきな場所」と思うという。

都市景観の専門家も、アーツ&クラフツも、バードウォッチャーも、同じ河畔の同じ林を指して「すてきな場所」と言っているのである。本当に心む景観は誰にとつても同じで、しかもその自然は多様性に富んでいる。世界的に自然保護と復元が急務であり、それには世界各地で見近な自然を取り戻していく努力が不可欠である。自然調査や観察データによる自然の豊さの裏付けと、市民が繊細な自然美を認知し、それを精神的な拠り所とし得る様な啓蒙活動が、市民活動の車の両輪として重要な要素であろう。

(北海道東海大学非常勤講師・札幌市在住)

のころ豊平川で遊んだ人達から「少しでも元の川の植生を復元してほしい」という要望もあつた。発起人でイラストレーターのNさんも、自然の河畔の風情は本当にすてきで、四季折々の美を見つかけられると言う。

海の植物・コンブたちのいきざま (上)

(第五回自然保護講座より)

川嶋 昭二

(元函館水産試験場長)

海藻というと、おそらくみなさんはすぐコンブが頭に浮かぶと思いますが、それは植物としてのコンブではなく、食べ物としてのコンブではないでしょうか。生きたコンブが海の中でどのような生活をしているか、どんな仲間がいるのかなどは、あまりご存知ないのではないかと思います。

コンブというのは海藻の中の一つの群ですから、コンブの話の前に海藻について基本のお話をします。海藻は海の植物なので、土の上に生えて空気の中で生活している陸上の植物とは大きく違うとお考えでしょうが、たしかに非常に違う面もありますが、結構似ている面もあるのです。

植物界の系統樹を見てみますと、一番上に最も進化した被子植物、それから裸子植物などよく親しまれている陸上の植物があり、その下にはシダ植物などがありますが、年代を遡っていきますと、緑藻と車軸藻という群があり、さらに遡るとこの系統から枝分かれした褐藻と紅藻という群があります。さらに古いところに細菌類が出てきます。このように植物全体の系統樹の中で、原始生物から枝分かれした紅藻類、褐藻類、緑藻類の三つの群を称して海藻と呼

表1 海藻および陸上植物に含まれる主な光合成色素と光合成産物

色素	紅藻	褐藻	緑藻	陸上植物
クロフィル a/b	a β-カロチン ルテイン ゼアキサンチン	a, c β-カロチン フコキサンチン ピオフィキサニン	a, b β-カロチン ルテイン ピオフィキサニン ゼアキサンチン	a, b β-カロチン ルテイン ピオフィキサニン ゼアキサンチン
フィコビリ n	R-フィコビリ R-フィコビリ アロフィコビリ			
光合成産物	紅藻澱粉	ラミナラン	澱粉	澱粉

びます。

海藻というのは、たくさん細胞からできた多細胞性で目に見える大きな藻類のことをいい、今述べた三つの藻類群から成るわけです。その中で緑藻は、これをたどって行くとい現在の陸上の植物にたどり着きます。つまり陸上の植物の先祖にあたるわけです。海藻が持っている色素をみますと、緑藻も褐藻も紅藻もすべてクロフィルaを持っていきますし、緑藻は陸上の植物とまったく同様にクロロフィルaとともにbも持って光

合成によって澱粉をつくり出します。褐藻はクロロフィルaのほかにcとフコキサンチンという褐色の色素を、また紅藻は紅色の素になるいろいろな色素を含んで、ラミナランとか紅藻澱粉という特別な光合成産物をつくり(表1参照)、酸素を海中に吐き出しています。植物性プラシクトンも同様ですが、海藻は海水中に酸素を供給し、水をきれいにする働きをしているわけです。

潮の引いた磯を見ると、たくさん海藻が生えていることに気がつくと思います。潮が満ちると海中に沈み、潮が引くと姿をあらわす所を潮間帯とか磯といいますが、そこには、暑さや乾燥に強いたくさん海藻が生えています。さらに詳しく見えますと、一番高い所(空気にあれる時間が一番長い所)には「浅草のり」が生えています。現在「浅草のり」として売られているのりは、すべてスサビノリを栽培したものです。本当のアサクサノリは、今は絶滅が心配されていて、なかなか見つけることはできません。フノリもスサビノリとほとんど同じ場所に生えており、これらは非常に乾燥に強い海藻です。函館付近では、これらのすぐ下にきれいな緑色をしたエゾヒトエグサという海藻が生えています。それから

します。私たちが普段コンブと呼んでいるのは胞子体（無性）世代で、葉の表面にある遊走子嚢（ゆうそうし）の中で無性の胞子を作ります。この時に減数分裂が行われます。遊走子は成熟すると海中に放出されて海底の岩などに着生し、発芽すると雄と雌の配偶体となり、これらが受精するとはじめて元の体（胞子体）に還るわけです。そしてこれをぐるぐる繰り返すのがコンブの一生です。分類学的に、コンブ類とはこのように非常に大きな体の胞子体と、顕微鏡でしか見えない小さな配偶体が、世代交代する種類ということになるわけです。

次に大きくなったコンブがどういう生活をしているか、環境とどういう関係があるかを見てみます。図3のように、コンブは真冬に発芽すると春に向かって段々伸びていき、夏以降は枯れて短くなり、冬になるとまたどんどん伸び、二年目の六月頃に最高の長さになります。成長と水温の関係は少しずれますが、コンブは水温が高くなる時に成長し、下がる時に枯れていきます。一方、水の中の栄養と水温とはまったく反対の関係にあります。図は窒素をとったものですが、肥料分は冬の寒い時が最高に多く、その時にどんどん窒

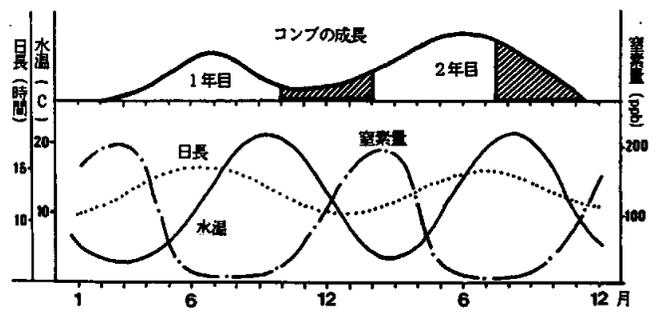


図3 2年生コンブの生活様式と水温、窒素量、日長の関係
コンブの成長は葉長の変化を、斜線部分は成熟期を示す

素を取り入れてコンブは伸びるわけです。反対に夏になると肥料分はほとんどゼロになり、コンブは枯れはじめますが、厚さを増して色も黒くりっぱになつてきます。

夏になつて肥料分がゼロになるのにコンブはどうして生きていくのかといいますが、実は、それを補うのが夏の強い光のエネルギーです。光を取り入れ炭酸同化作用を行って自分の体を作り海中に酸素を吐き出すということをして、この夏の時期に行っているわけです。（つづく）

陳情書 要望書 意見書

大雪山国立公園公園の計画立案への質問に対する回答要請
一九九六年一月十日

環境庁長官 大島 理森 様

(財)北海道自然保護協会会長 俵 浩三
十勝自然保護協会 会長 及川 裕

北海道自然保護連合 代表 稲田孝治
私たち三団体は一九九五年三月二十五

日づけで、環境庁長官あてに「大雪山国立公園公園計画における土幌高原道路の取扱いに関する質問状」を、別紙写しのとおり提出いたしました。

しかし、これに対して環境庁からは何の回答も説明もないまま、九十五年五月三十日、道道士幌別湖線（土幌高原道路）はいわゆる「新トンネル案」として公園計画案に位置づけられて自然環境保全審議会に諮問され、審議会からそれを適当とする即日答申がなされました。

それからかなりの日時を経過した後、環境庁の担当者から、「環境庁としてはこの種の質問には文書回答をしないことにしている。また時間が経過したのでいまさら回答しても無意味なこともある。聞きたいことがあれば環境庁へくれば説明する。西北北海道地区国立公園事務所でも対応が可能である」旨の電話連絡がありました。

しかし「時間が経過したのでいまさら

回答しても無意味」「文書による回答はしないことにしている」というような説明はまったく納得できませんし、自然環境保全審議会への諮問前に何の説明もなされなかったことは遺憾のきわみであります。三月二十五日づけで質問したことは、いずれも自然保護や公園計画に対する考え方の根幹にかかわる問題です。出先機関に説明を求めても、考え方の根幹にかかわる部分は満足な回答が期待できません。

また道道士幌別湖線（土幌高原道路）が事業執行に向けて動くのは、現在および今後の問題であり、その可否は公園計画に位置つけた考え方の根幹と深く関わっています。したがって、三月二十五日づけで質問した事項については、時間は経過しておりますが、文書による回答をくださいますよう、ここに強くお願い申し上げます。

自然環境保全審議会の審議経過の説明を
求める要望書

一九九六年一月十日
自然環境保全審議会
自然公園部会長 信澤 清 様

(財)北海道自然保護協会会長 俵 浩三
十勝自然保護協会 会長 及川 裕

北海道自然保護連合 代表 稲田孝治
私たち三団体は貴自然環境保全審議会

に対して、一九九五年五月九日に「大雪山国立公園公園計画の見直しにおける土幌高原道路の取扱いに関する要望書」、

同五月十三日に「大雪山国立公園現地視察後の土幌高原道路問題審議についての要望書」をそれぞれ別紙写しのとおり提

出しました。

吉元 豊さんの思い出

八木 健三



この正月、新聞紙上で吉元豊さんが一月一日、六十九才で逝去されたことを知って愕然とした。相変わらず元気だとばかり思っていたのに、急に亡くなられるとは。

思い出せば吉元君（以後君付けで呼ばせて頂きたい）に初めて会ったのは、一九四七年八月、東北大学にいた私が、北大佐々教授の紹介で吉元君のお宅に泊めていただき、根室の車石を調査した時であった。当時秋田鉱山専門学校の学生だった吉元君は、たいへん地質には熱心で、それから三週間ほど一緒に調査を行った。当時は食料事情は最低で、宿屋に泊まるのも困難な時代だったので、吉元君のご両親のご好意が実に有り

難かった。

翌年の夏にも再びお世話になって、野外調査を完了することができた。そして一九四九年には車石のアルカリ玄武岩の研究で私は学位をとり、吉元君もこれを論文として提出して秋田鉱専を卒業し、根室高校の教員になった。それ以後一九八五年退職するまで、三十六年間高校教師をつとめられたが、その間も熱心に根室半島の地質を調査し、車石などのアルカリ岩だけでなく、化石などにも研究を進めていた。

それとともに自然保護に強い関心を持ち、根室自然保護協会の幹部、また日本野鳥の会根室支部会長として、さらには道協会の理事として活躍された。私にとって忘れられないのは、一九八三年日本野鳥の会の委嘱により「春国笠原生野鳥公園計画」のための地形・地質の調査を吉元君とともに行ったことだ。砂丘の方々に孔を掘って、砂に挟まれた女阿寒岳の火山灰の存在から、砂丘は一四

〇一二〇〇年以前に生成したが、過去八十五年間の五万分の一地形図から、年々縮小していることが明らかになった。

この頃、春国笠の海岸沿いに「望郷ライン」と称する道路建設の計画が持ち上がった。私たちは、「こんな砂地に橋や道路を造つたら、地震のときには液化化作用によって、大きな災害のおそれがある」と当時の大矢市長に強く反対意見を述べたことがある。結局道路計画は中止され、懸案の春国笠原生野鳥公園が昨年完成したことは慶賀にたえない。

「昨年秋心筋梗塞のため入院し、十二月末に手術をうけました。その時に『三月には家に帰れるね』と言ったのが、最後の言葉になってしまいました」と泰子夫人から伺ったとき、五十年來の友の心中を察して、熱いものが胸にこみ上げてきた。

吉元君はこの数年「根室博物館計画委員会」の委員長として、その実現に尽力してこられたが、その死の二日前に設立が最終決定したという。天上で、この知らせに喜んでおられることであろう。

心から吉元君のご冥福を祈る次第である。

（名誉会員・札幌市在住）

出いたしました。

しかし、貴審議会からは、ここで提起された問題点や疑問点に対して、審議会内部でどのような論議が行われ、どのような理由で、どのような結論がだされたかは、いっさい明らかにされないうまま、道道上幌然別湖線（土幌高原道路）の、いわゆる「新トンネル案」を是とする方向の審議会答申がなされたとの結果だけが公表されました。

いまだ申し上げるまでもなく、環境問題に対して広く国民参加が求められていることは「環境基本法」の趣旨に照らしても明らかなことであり、また一九九五年九月二十九日には「審議会等の透明化、見直し等について」が閣議決定され、そのなかには「一般の審議会は、原則として、会議の公開、議事録の公開などを行うことにより、運営の透明性の確保に努める」旨の記載がある、と承知しております。

これらのことから考えても、自然環境保全のための審議会が、自然環境保全の団体から提起された疑問や質問に対して、いっさい答えることなく、ただ答申結果だけが公表されることは遺憾なことと考えます。

したがって、一九九五年五月三十日に行われた自然環境保全審議会、あるいはその直前の現地視察前後の打合会を通じて、この道路計画に対して、どのような論議が行われ、どのような理由で、どのような結論が導かれたのか、文書でご説明くださるよう強くお願い申し上げます。また当日の審議会議事録も公開されるようお願い申し上げます。

日高山脈襟裳園内「風の館」
計画を慎重に取扱うことへの要望
一九九六年二月九日

北海道知事 堀 達也 様

(中)北海道自然保護協会 依 浩三

日高山脈襟裳園内特別地域内の「えりも岬」に、えりも町が「風の館」を建設する計画があり、北海道では園内公園事業の一環として、これを認める方向で検討に入った、と側聞しております。

自然公園において、その地域の自然の特徴などを人々に理解させるため、「ピジターセンター」の役割を果たす施設は必要なものと考えますが、その施設の建設が、自然環境に悪い影響を与えることがあつてはならないのは当然です。

しかし、いま建設が計画されている「風の館」は、以下のとおり自然環境保全上の問題がありますので、日高山脈襟裳園内公園の保護・利用が適正に行なわれ、将来に悔いを残すことのないよう、慎重の上にも慎重に検討されることを強く要望いたします。

記

一 えりも岬の特異な地形を保全 する
視点が欠落

えりも岬は日高山脈の南端が海中に没する部分である。これは、その特異な造山運動で知られる日高山脈の山頂部や中腹部と同様に、氷い地球の歴史のなかで形成された貴重な地形である。また、えりも岬は、宗谷岬、知床岬、ノサップ岬などと並んで「さいはて」のイメージに結びつく、北海道の魅力の根源の一つとなつている。その地下部に人工物が設置

されれば、特異な地形が傷つけられるだけでなく、ここを訪れる何百万の観光客が感じとつている「自然の感銘」を、いちじるしく損なうこととなる。

「風の館」の計画は、地上からの風致を損なわないよう配慮して地下式にした、とされているが、そこには「地形保全」に視点がまったく欠落している。

たとえ地上から見えてなくても、えりも岬の特異な地形は「風の館」で大きく改変され、海に向かって鉄とガラスの人工物が露出する。鉄とガラスの人工物は五十年〜一〇〇年のうちに必ず老朽化し、後は復元が不可能な「傷ついたえりも岬」が残されるだけである。えりも岬の特異な地形は、人為的に損なわれることなく一〇〇年〜一〇〇〇年の後世まで残されなければならない。

したがって、えりも岬を削る「風の館」は自然公園施設としての適性に欠け、また「持続可能な開発」という地球環境時代の理念に反している。

二 「風の館」は岬の先端でなくても機能する

(1) 「風の館」のもたらす事業効果は、えりも岬の資料(地域振興主要事業紹介・襟裳岬ピジターセンター「風の館」整備事業)によれば、①地域イノベーションの核となる、②継続的に発展していく可能性をもつ、③町の誇りとなり、町のアイデンティティの象徴となる、④住民の「風」に対する意識を誇りに変える、⑤交流人口が増大される、⑥就業機会の創出が図られる、⑦「風」を介した地域ネットワークが形成される、の七点が挙げられている。これらの効果をもたらすため

自然事典 44 豆事

流水と動物

中川 元

(知床博物館)

オホーツク海北部で生まれた沿岸水や流水は徐々に南に範囲を広げ、一月末から二月初めに北海道に到達する。「流水の海」というと静的なイメージがあるが、実のところ「野生動物でにぎやかな海」というのが適切である。流水や沿岸水など、海水域の周縁部は野生動物が多いことが知られている。その理由の一つは餌資源が豊富なことだ。海水の中に豊富に含まれる植物プランクトンは海水にとけ出て増殖し、動物プランクトンや底生生物、甲殻類や魚の餌となる。そしてそれらはさらに大きな動物、鳥類や海棲哺乳類の餌となっている。

ゴマフアザラシやクラカケアザラシは流水の上で出産する。生まれたばかりのアザラシの子は保護色の真っ白な産毛でおおわれ、母親は二週間の間水の上で授乳し、育児を続ける。このように流水は、北海道の野生動物の多様性を維持する上で重要な役割を果たしているといえよう。

海に浮かぶ流水は、鳥類や哺乳類にとつて餌場に近い休み場や繁殖の場にもなっている。オオワシやオジロワシは流水から飛び立ち、海面で捕った魚を再び流水上にもどって食べる。流水は海の上の食卓だ。流水が無い海では、海岸の樹上から海上までの長い距離を往復しなければならない。



に、「風の館」がえりも岬の「先端」になければならぬ理由は一つもない。すなわち「風の館」は、えりも岬の先端でなくとも岬地域内の適地であれば、目的を果たすことができるものである。また岬の先端でなく、岬地域の地上部の立地であれば、たとえ老朽化した後に撤去したとしても、地形そのものが損なわれることは少ない。

(2)「風の館」は、「天気の良い日でも安心して岬に行ける」のがセールスポイントだという。しかし天気の良い日は展望がきかないのが通例であり、これは意味がない。しかもガラス張りの温室のような「無風」環境で「強風」地帯を展望するのは、自然公園の自然体験(Outdoor Recreation)の本質に反するものである。

したがって「風の館」は、岬の先端ではない別の場所に変更すべきである。

三 計画・経営内容もさらに慎重な検討を

(1)「風の館」は、えりも岬の「強風地帯」を逆手にとった発想だという。しかし現計画では、そこに使われるエネルギーに地域の自然の特性が活用されていない。強風地帯の自然を強調する「風の館」という以上は、たとえ一部であっても「風力発電」を導入し、それを展示・解説することによって、その地域の特徴がいつそう鮮明になることは明らかである。またそのことによって、「持続可能な開発」の理念に一步でも近づけることができるのである。

(2)「風の館」はえりも町の第三セクター経営になる予定と聞いている。しかし、

北海道内の市町村では、「地域活性化」の名目で建設され第三セクターによって経営される観光リゾート施設が、経営不振で行き詰まり、その赤字を住民の税金で補填する不幸な先例が続出している。とくに博物館的な施設は、その内容の善し悪しにかかわらず、経営的に不利なのが一般的である。「風の館」が前者の轍を踏むことのないよう、経営見直しなどの検討は慎重の上にも慎重を期さなければならぬ。

したがって「風の館」は、計画・経営的内容についてもさらに慎重に検討すべきである。

新会員紹介

95・10・22～96・1・20現在

【A会員】

佐藤 美津子 寺 沢 佳 昭
山 形 裕 規 田 畑 壮 之
川 崎 誠 司
【B会員】
佐 藤 雪 子

(敬称略)



(会場記載のないものは事務所で実施・敬称略)

勉強会(かである2・7)

十一月十七日

「森林生態系保護地域について」

(参加者四名)

一九九五年度第四回拡大常務理事会

十一月二十四日

出席者 俵、佐藤(謙)、市川、熊木、土方、福地、池田、江部、大久保(九名)

議題

一、協会の活動について
会員拡大のためのプロジェクトチームを作り、作業をすすめることになった。

二、講演会について

二月末か三月上旬に講演会を開催することになった。

一九九五年度第五回拡大常務理事会
十二月二十二日

出席者 俵、島山、熊木、土方、福地、江部、大久保、佐藤(正)(八

名)

報告

一、えりも岬「風の館」建設計画について
資料が配布され、内容及び状況の説明がなされた。

二、講演会の開催について

二月二十九日に「地球の歴史から見た植物」を開催する。

議題

一、土幌高原道路計画問題について
三者協議会からの提案をうけて、環境庁および審議会あて要望書提出、リーフレット再作成などを了承した。

第一五三回理事会

一九九六年一月二十日

出席者 俵、佐藤(謙)、島山、熊木、伊達、土方、福地、池田、石田、江部、大館、大久保、佐藤(正)、寺島、稗田、水尾、宗像(十七名)

議題

一、入会者の承認について

A会員八名、B会員一名の入会を承認した。

二、協会活動について

プロジェクトチームから会員拡大その他について提案があり、具体化に向けて引き続き検討することになった。

三、えりも岬「風の館」建設計画に

ついで

岬の景観を大規模に変える計画であるため、必要に応じ意見書を提出することになった。

自然保護講座(かでのる2・7)

「植物たちの置き手紙」

二月八日・十五日・二十二日

(参加者七十八名)

自然観察会

二月二十四日

「冬芽と動物の足跡ウォッチング」

(西岡水源地 参加者 二十二名)

(抄)

雪だるま基金

小野 朋士

一〇、〇〇〇円

☆ありがとうございます(敬称略)

寄贈図書

寄贈者 (財)前田一歩園財団

・阿寒国立公園昆虫目録

☆ありがとうございます(敬称略)

●自然観察会

「夏鳥とハスカップ」

ベニバナイチヤクソウ等、

野生植物との出会い」

日時 五月二十五日(土)

午前九時～十二時

集合 ウトナイ湖サンクチュアリ

JR植苗駅前集合

用意 双眼鏡、昼食

「新緑の藻岩山を訪ねる」

日時 六月八日(土)

午前十時～午後二時

集合 南34条西11丁目バス停前

(札幌駅バスターミナルま

たは地下鉄東西線西11丁目

から市バス真駒内線ほか)

用意 昼食

※いずれも参加費無料、申込み不要

問い合わせ先 当協会事務局

(☎〇一一二五二一五四六五)

事務局だより

せて納入して下さい。

【会費】

個人A会員 四、〇〇〇円

個人B会員 二、〇〇〇円

(A会員と同一世帯の会員)

学生会員 二、〇〇〇円

団体会員 一口 一五、〇〇〇円

【会費納入方法】

郵便振替口座

〇二七一〇一七四〇五五

北海道拓殖銀行本店

〇一七二五九(普通)

北海道銀行 一〇一四四四(普通)

(山辺)

●先頃行われた「冬芽と動物の足跡ウォッチング」の自然観察会は、陽気にも恵まれて盛会裡に終了しました。特に、昨年の夏に自然観察指導員となった若い会員の人達が参加されたことは、協会の若い世代会員への期待と相まって有意義なことです。一九九六年度は、若い人達がこぞって自然を愛する仲間として、益々活躍できる協会へ発展するための大事な理事改選の年であります。事務局も、残った事業の完結、決算や予算の編成に加えて、理事選挙の準備と目のまわる忙しさの毎日ですが、ファイトをもって頑張っております。●前回号での会員皆様への問題は、「ナキウサギは冬眠するか？」でしたが、ナキウサギは冬眠はせず、夏の終りから、本格的には九月から十月の間に、色々な種類の植物を貯食場(岩の下の隙間とか、岩の間の奥など)に運んで貯え、それを食べて冬を越すと言われています。●四月一日から新年度(一九九六年度)になりますので、同封の郵便振替用紙により、四月三十日までに新年度会費の納入をお願い致します。なお会費未納の方は未納会費と合

一九九六年三月十二日

〒060 札幌市中央区北三西十一加森ビル5 六階

発行所 社団法人北海道自然保護協会

電話(〇一一) 二五一五四六五

発行人 依 浩 三

印刷 株式会社印刷

この紙は再生紙を使用しています。